

エジプト留学生が論じたマレー社会の再建

ズルキフリ・ムハンマドにみる1950年代のマレー人知識人の思想の系譜

山本 博之

1. はじめに

『カラム』は、1956年にシンガポールで設立されたムスリム同胞団の事実上の機関誌だった。シンガポールのムスリム同胞団はエジプトのムスリム同胞団とは組織的なつながりはないが、思想上の影響を大きく受けていた。その様子は、『カラム』誌上に掲載されたムスリム同胞団の団員に向けた論文などに見てとることができる。また、マラヤからエジプトに留学した留学生などを通じてエジプトのムスリム同胞団などの運動が紹介され、その思想がもたらされた。そのような仲介役となった留学生の1人に、留学先のエジプトから『カラム』に寄稿し、帰国後には新設されたイスラム・カレッジの教員を経て汎マラヤ・イスラム党(PAS)の幹部となったズルキフリ・ムハンマド(Zulkifli Muhammad)がいる。

ズルキフリ・ムハンマドは、1927年にマラヤのクダ州で生まれ、1947年から1952年までエジプトに留学し、帰国して1954年にイスラム・カレッジの事務長に任じられた。1955年、独立を2年後に迎えたマラヤで初の連邦参事会選挙でズルキフリはPASから出馬したが落選し、1959年に国会議員に初当選した。1964年の選挙で再選されたが、その翌月に交通事故死した。この間、1956年および1959年のPAS党首選でブルハヌッディン・アルヘルミに敗れ、ブルハヌッディン党首のもとで副党首を務めた。

本稿は、『カラム』の記事執筆者のうち、ズルキフリ・ムハンマドによる論説記事をいくつか紹介する。はじめに、『カラム』が刊行されていた時代およびその時代におけるズルキフリの位置づけを概観しておきたい。

『カラム』は1950年にシンガポールで創刊され、後に発行地をマレーシアに移して1969年まで刊行が続い

た。『カラム』は、日本占領期後にジャウィ(アラビア文字表記のマレー語)による刊行を続けた数少ないマレー語雑誌であるとともに、マラヤ／マレーシアにおけるイスラム主義運動の「空白期間」に刊行されていたイスラム系雑誌であり、それゆえに1950～60年代の東南アジアのムスリム社会の状況をうかがう貴重な資料である。

日本占領期後、マラヤ及びシンガポールの各地でマレー人やムスリムを主要構成員とする政治団体が結成された。これらの団体は1946年にイギリスが提案したマラヤの統治形態をめぐるイギリスとの関係やイスラム教の位置づけなどによりいくつかグループ分けされていき、イギリスとの良好な関係を維持して段階的な独立を求める統一マレー人国民組織(UMNO)と、「マレー人左派」と総称されるイスラム主義勢力と社会主義勢力が同居したマラヤ・ムラユ民族党(PKMM)の2つの陣営に分かれた。

UMNOはイギリスと連携して独立後の政権の受け皿になる道歩んだのに対し、PKMMメンバーのうち反英独立闘争を掲げた社会主義勢力は1948年の非常事態宣言と時を同じくして非合法化され、指導者の多くが逮捕・投獄された。PKMMメンバーのうちイスラム主義勢力はシンガポールに拠点を移したが、1950年のナドラ事件¹で指導者の多くが逮捕・投獄された。これによりマラヤおよびシンガポールにおいて政治の表舞台からイスラム主義の要素が姿を消すことになる。イスラム主義の要素がマレーシアの政治や社会運動において再び重要性を持って語られるようになるのは1970年代以降のダクワ運動の登場によってである。このように、マラヤ／マレーシアの政治史において、1950年代と1960年代は「イスラム主義勢力の不在期間」として語られている。『カラム』が刊行されていたのはちょうどこの期間だった。

1 日本占領期中にマレー人女性に預けられてムスリムのナドラとして育てられた女性に対し、シンガポールの裁判所がオランダ人の両親の親権を認めてオランダへの送還を命じ、これに反対したムスリムがデモを行って多くの逮捕者が出た。

2. イスラム主義勢力と PAS

政治の主流派とはならなかったが、1950年代と60年代を通じてマラヤ／マレーシアにイスラム主義政党が存在していなかったわけではない。1950年に KMM の指導者層が逮捕・投獄されると、UMNO 内に設置されたウラマー会議が1951年に汎マラヤ・イスラム協会 (PAS)² として結成された。UMNO はマラヤ各地のマレー人団体の連絡組織のような性格の組織として結成されており、PAS と UMNO の両方に登録するメンバーも少なくなかったが、1954年には PAS は幹部が他の政治団体の幹部と兼職することを禁止し、さらに1955年には PAS は全ての党員が他の政治団体に登録することを禁止し、これによって PAS は UMNO から完全に切り離されて独自の政党となった。

独立を2年度に迎えた1955年の連邦参事会選挙では PAS は53議席中1議席を獲得し、独立時には連邦議会で議席を持つ唯一の野党となった。1956年、PKMM のブルハヌッディン・アルヘルミが PAS の党首に選出され、旧 PKMM 勢力が PAS に合流した。1959年の総選挙で PAS は13議席を取って野党第1党となり、同時に行われた州議会選挙ではクランタン州とトレンガヌ州で州政権を握った。1964年の総選挙を経て、1965年には党首ブルハヌッディンがインドネシア側に通じていたとして逮捕され、副党首のムハンマド・アスリが党首を代行した。ブルハヌッディンは1966年に釈放されたが、健康を害して1969年に死去した。

PAS は1969年総選挙で12議席を獲得し、クランタン州の州政権を維持した。この総選挙を契機にクアラルンプール周辺では5月13日事件と呼ばれる民族衝突事件が起こり、国会が停止された。国会再開にあたって与党連合を拡大した国民戦線 (Barisan Nasional) 体制が発足すると、PAS は国民戦線に参加した (1978年に脱退)。

このように、PAS の歴史においては、UMNO との相互乗り入れを解消してブルハヌッディンが党首となった1956年ごろから、1969年にブルハヌッディン

が死去し、国民戦線の枠内で UMNO と連立するまでのあいだ、「マレー人左派」による指導のもとで UMNO と対峙していた時期があった。この時期の PAS を特徴づけるのは第一に党首のブルハヌッディンであるが、ブルハヌッディンがインドネシアとの連携を重視していたのに対し、ブルハヌッディンのもとで副党首を務めたズルキフリ・ムハンマドの影響も考慮する必要がある。ズルキフリ・ムハンマドはエジプトへの留学経験があり、留学中にエジプトから『カラム』に寄稿していたことから、エジプトや中東のイスラム主義思想を PAS に伝える役割を担っていたと考えられる。

3. ズルキフリ・ムハンマド

ズルキフリ・ムハンマドは、1927年3月22日、クダ州クアラカンサーのコタ・ラマ・キリ (Kota Lama Kiri) で生まれた³。

父親のモハメド・アルシャド (Haji Mohamed Arshad) はクアラカンサーの公立病院に勤務する事務官で、母親のアルバイア (Hajjah Arbaiah) とのあいだに10人の子をもうけた。ズルキフリは10人きょうだいの2番目で、家庭ではニャ (Nyah) の愛称で呼ばれていた。ズルキフリは英語教育を受けた家庭の出身で、後にズルキフリがエジプトに留学したときに父親に対して英語で手紙を書いていたという説 [Alias Mohamed 1994: 87] と、ズルキフリはエジプト留学中に英語を学び、父親への手紙ははじめマレー語だったのがしだいに英語で書くようになったという説 [Zakiah 1980: 2] がある。

ズルキフリは、小学校で学んだ後に宗教学校で学んだ。1935年から1939年までペラ州のパリット (Parit) のパリット・ムラユ小学校で学び、1940年から1941年までパリットのアジザ学校 (Sekolah Aziziah) で、1943年から1945年までクアラカンサーのマドラサ・イドリシア (Madrasah Idrisiah) で学んだ。その後、1946年から1947年までペラ・マレー人青年同盟 (Perikatan Pemuda Melayu Perak) に参加した。

1947年8月8日、留学のためエジプトに渡航した。はじめアズハル大学の法学部で学び、1951年からはカイロ・アメリカン大学で教育学を学んだ。アズハル大学では、数学、心理学、現代史、社会学、経済学、英語、教育哲学、一般哲学などを学び、特に理系科目を熱心に学んだという。父への手紙では、データを集めて記

2 設立時の名称は汎マラヤ・イスラム協会だったが、後に汎マラヤ・イスラム党に、さらに汎マレーシア・イスラム党に改称した。略称の PAS は汎マレーシア・イスラム党 (Parti Islam Se-Malaysia) のジャウィ表記の頭文字を並べてローマ字にしたもの (ジャウィ表記なので Islam の頭文字はアリフになり、ローマ字にすると A になる)。

3 以下、ズルキフリ・ムハンマドの経歴については、特に断らない限り [Zakiah 1980] による。

憶することが中心のアズハル大学の教授法への不満を綴っている[Alias Mohamed 1994: 87-88]。

ズルキフリは、エジプト留学中に学生団体での活動を通じて政治活動に加わった。1948～50年には在エジプトのマラヤ半島出身者を中心とした半島部マレー人連盟(Persekutuan Putera-Putera Melayu Semenanjung)の総裁をつとめ、1951～1952年には同団体の顧問となった。また、同じころ、インドネシア・マラヤ学生連合(Kesatuan Pelajar-Pelajar Putera Malaya dan Indonesia)の委員も務めた[Alias Mohamed 1994: 88]。また、ズルキフリはエジプト留学中にムスリム同胞団の活動に関心を持ち、その集会に頻繁に参加していた[Ibnu Hasyim 1993: 57]。

1952年、病気のため、カイロ・アメリカン大学での課程を修了する前にマラヤに帰国した。同年、最初の著作である『社会とシャリア』(Masyarakat dan Syariat)を出版している[Ibnu Hasyim 1993: 57]。

ズルキフリは帰国後にイスラム・カレッジ設立の必要を唱え、1954年にジョホール州ジョホールバルにイスラム・カレッジが開設されると事務長に任じられた[Alias Mohamed 1994: 88]。イスラム・カレッジが1955年1月にスランゴール州クランに移転するとズルキフリもクランに移り、1957年には同カレッジの講師になって、1959年までマレー文学やアラブ文学などを教えた。

この間、1955年7月の連邦参事会選挙では、クアラカンサーの南スンガイ・ペラ(Sungai Perak Selatan)区で統一マレー人国民機構(UMNO)から候補者として名前が挙げられた。しかし同党の州執行部が候補者として選ばなかったため、ズルキフリはUMNOを離党して汎マラヤ・イスラム党(PAS)に入党した。選挙で

はPASの候補として中央スランゴール(Selangor Central)区から立候補したが、選挙ではマラヤ連盟の候補に敗れた。

PASでは総裁職をめぐって1956年と1959年にブルハヌッディンと2度争い、いずれも敗れて副総裁に就任した。1959年の総選挙ではクランタン州のパチョク区から立候補し、マラヤ連盟の候補を破って下院議員に初当選した。

ズルキフリは、イスラム教の地位は非ムスリムの支持があつてこそ強化され则认为、PASを非ムスリムに開放することを主張した。しかし、党員からは支持が得られなかった[Alias Mohamed 1994: 89]。

1964年4月25日の連邦選挙でパチョク区から立候補して再選されたが、5月18日の連邦議会の召集を目前にして、5月6日に夫人とともに交通事故死した。

ブルハヌッディンの引退とズルキフリの死去により、PASはモハマド・アスリおよびその支持者であるクランタン出身者の優位が確立していった[Alias Mohamed 1994: 90]。

4. ズルキフリによる『カラム』の記事

ズルキフリ・ムハンマドは、『カラム』に1951年1月から1958年1月まで11本の記事を執筆している(表1)。(A)エジプト留学中(および帰国直後)に書かれた3つの記事、(B)イスラム・カレッジで教えるとともに政界進出を模索していたころに書かれたイスラム教とマレー文化に関する6つの記事、そして(C)PAS副総裁を務めるあいだに書かれたマレー語に関する2つの記事である。

表1

号	年月	分類	コラム名	記事名
7	1951.2	A	エジプトからの思索(fikiran dari Mesir)	イスラムと今日の世界(Islam dan Dunia Hari Ini)
13	1951.8	A	エジプトからの思索(fikiran dari Mesir)	宗教と社会: ウラマーは立場を確立せよ (Agama dan Masyarakat: Alim Ulama Dituntut Menegaskan Pendiriannya)
27	1952.10	A	エジプトのマレー人の思索 (fikiran putra Semenanjung di Mesir)	今日の社会とイスラム法(Undang2 Islam dengan Masyarakat Sekarang)
52	1954.11	B	我々の強さの秘密 (rahsia kekuatan kita)	道徳の礎の上で(Di Atas Landasan Akhlak)
54	1955.1	B		学派間の対立の起源(Sebabnya Timbul Perselisihan Mazhab2)
55	1955.2	B		前向きな宗教(Agama yang Positif)
61	1955.8	B	我々の強さの秘密 (rahsia kekuatan kita)	イスラム共同体を教育する(Mendidik Umat Islam)
70	1956.5	B	イスラム文化(kebudayaan Islam)	文化とイスラム(Kebudayaan dan Islam)
75	1956.10	B		危険な社会性の拡散(Kelonggaran Kemasyarakatan yang Berbahaya)
82	1957.5	C	言語の広場(medan bahasa)	マレー語の発展(Perkembangan Bahasa Melayu)
90	1958.1	C	言語の広場(medan bahasa)	マレー語への信頼を深める(Menebalkan Kepercayaan kepada Bahasa Melayu)

5. 記事紹介

以下では、(B)のイスラム教とマレー文化について書かれた6つの記事のうち、ズルキフリがPASに参加してPASの党首選に出るまでに書かれた2つの記事を紹介する。やや翻訳調で書かれたこの文章を見てもわかるとおり、エジプトの二つの大学で英語とアラビア語のそれぞれで学んだズルキフリは、イスラム教だけでなく、英語を介して教育学や社会学や心理学といった学問を身につけた。ズルキフリの関心は、宗教のための宗教ではなく、時代の変化に対応しながら人々の日々の暮らしをよくしようとする方法である。下記では、合理性のいかにかわらず、あらかじめ定められた振る舞い方を多くの人々が共有していることによって機能する文化と、個々人の精神を鍛えて対応力を強める教育に関心が向けられている。イスラム教は、文化と教育の両方の側面でマレー社会の立て直しに有効であるとしている。

(1)ズルキフリ・ムハンマド

「イスラム共同体を教育する」(1955年8月)⁴

イスラム共同体の強さは、社会をイスラム式に建設するという強い信念を抱いている人々がイスラム社会に何人かいるだけでは実現できない。イスラム共同体は、現在のようにイスラム教とその生活様式がイスラム教徒自身の目に異物と映ることのないように、イスラム式の精神と教育を備えた人々を作り上げていかなければならない。

これが、我々が現在直面している問題、すなわちイスラム教育の社会への接合の問題である。この責務は念入りの計画なしに実現しえない。計画を立てる前に、今日の状況をすみずみまで調べる必要がある。いかなる状況にあり、その原因は何であるのか。それがわかった後にはじめて改善の手段をとることができる。

イスラム共同体の精神は、特に都市部で損なわれているようにみえる。イスラム共同体のまっただ中に「異教徒の」支配者が存在する現状において、非イスラム式の生活様式の要素が存在するためだ。しかし実際には、この「精神の」不在は、1人1人の教育の強さの欠如に由来する精神の弱さによってもたらされたも

のである。非イスラム式の生活様式の影響はもちろん強いが、これは現在のイスラム社会だけにあてはまるものではない。過去にも現在のような時代はあったが、そのときは人々のイスラム教育が厚かったため、イスラム教育を固く維持した生活を送ることができた。イスラム教を維持したままでは、イスラム教徒をイスラム教の印のついた箱の中に押し込めてそこで暮らすよう迫ることはなかったし、それは非イスラム教徒と一緒に生活する全ての面で実行されていた。というのも、イスラム教は、そのような「非イスラム教徒の」人々と一緒に生活したり付き合ったりする方法を定めているためだ。

この混成社会において我々が求めているのは、イスラム教の確固たる教育と、それへの強い信念である。その水準に達するまでには長く深い鍛錬が必要であり、それは学校だけでは不十分で、鍛錬をずっと継続しなければならないし、しかもその方法も、それぞれの人生の段階に対応した様々なものでなければならない。

子供たちへのイスラム教育を作り上げるためには、イスラム式の生活環境が不可欠である。まず家族と社会がイスラム式でなければならない、それによってのみイスラム教育の意味が浸透しうる。イスラム教にとって、人種や家系は考慮されないし、意味を持たない。教育の用語を用いるならば、生活様式の実践と思考においてイスラム教は子供の関心に対して明晰でなければならない、家族の型が彼の成長を促す。一方で、彼は学校に入れられ、そこで与えられる教育を受ける。もし学校でのこれらの鍛錬が本来あるべき姿で整っていれば、この段階において教育は安全である。しかし、覚えておくべき重要なことは、彼に規則と習慣だけ与えればいいのではなく、限られた人生の中で、責任を持ち、人と妥協し、強い信念をもつような鍛錬を彼が与えられる必要があるということだ。

現在我々が直面している教育の困難の中で大きな問題は、学校を卒業した後の時期である。それは、彼が自由を謳歌し、自分の行動が管理されない状況を楽しんでいる時期である。教育学によれば、この段階は彼によって非常に重要である。なぜなら、その新しい自由の使い方を知らないため、彼は誰にもその自由を管理されたくないと感じるためだ。この段階は、彼が成人して思考の健全さがもたらされるまで続く。ここでは、ダイナミックで湧き上がるようでありながら習慣と相反することのない教育を身につけることは

4 Zulkifli Muhammad. 1955. "Mendidik Umat Islam." [Qalam 1955.8: 7-9].

不可能である。同年代の人々の集まりでの軽い議論は、スポーツや青年団や団体活動などでの鍛錬と同様に大切だ。教育者は、教える内容が習慣に反していないか気をつける必要がある。一般的に、激しい反抗や敵対は教育を受けた人に由来する。

青年期にイスラム教育を与えることは、彼らの精神的变化の時期であるため、より困難である。心理学によれば、青年期は信仰心は強いが、これはこの段階の心理的な攪乱によるものである。したがって、このときの信仰心が長く続くと考えすることはできない。しかし、受容の柔軟さは、宗教性を強める目的で利用することができる。そこで、青年たちに、重く宗教的な訓練を手ほどきすることは賢明である。彼らに重くしてもかまわない。なぜなら、習慣は宗教といわれるものを何でも受け入れる準備ができていたためだ。この受容は長く続かないので、青年期をすぎたら、その宗教的な感情を確固たるものにすることを助けるため、宗教に関する教えと広く深い説明を与える必要がある。

それは教育を個人の年齢や成長に合わせること、つまり知識の違いに合わせて教育を与えることである。異なる知識の状態にあり、異なる教育が必要なので、このことは容易ではない。知識が1人1人の心理に与える意味を深く理解していなければならないためだ。ある人の知識が多いか少ないかが問題なのではなく、知識の種類が問題なのだ。いずれにせよ、どの知識もイスラム教育を強めるために使うことができる。もし教育者がイスラム教育を本当に理解していたら、知識に向かい合うことは無知に向かい合うことより簡単である。ある人の知識は、誤解のために短い間に立場を変えることがあるだろうが、思考様式が整っていれば、その考えを教えようとするにあたって、イスラム教育者が実施するのは容易である。

基本的に、イスラム共同体への最初の教育は、人間の生と死が神への献身のためであるということへの導きに基いていることが望ましい。このことは、アッラーをその目の前に、そして全ての行いの中に置くよう駆り立てるだろう。人間との関係において、彼は常に、神の命令は人間との関係も含み、神による指定ややり方は人間が推測で作ったやり方よりもより賢明であると思うことだろう。

アッラーを知ることを通じて、人間は自分自身のことを知る。崇高さと万能さを備えるアラーの僕としての自分の水準が強く確信される。これはイスラム教の精神の強さであり、これが人々の生活態度へ、そして

人々の個性に意味を与えるのである。

多くの人々は、イスラム教育は精神的なものを求め、感情のレベルにおいてのみ行われると考えている。これは、イスラム教は慣習にすぎないとする人々と同様に誤りである。イスラム教育は、人生における思考様式や行動様式を包摂する。教育のあるイスラム教徒は、その人生をイスラム教の目を通して見る。彼にとって善悪の判断基準はイスラム式の基準である。この段階まで教育を身につけるには、イスラム教の深い精神と理解という肥料をまいたタウヒードの耕地に教育という種をまくことによってのみ達することができる。

イスラム教育の実施において重要なのは、我々が盲従と無知に向かうのではなく、強固な立場と強い信念に向かうということである。もしこれがイスラム共同体の心に浸透することができれば、いかなる混乱も、いかなる悪い状況も、彼らの人生に悪影響を与えることはないだろう。我々は、我々がこの混乱した世界のまっただ中で生きていかなければならないという事実を受け入れなければならない。そして、その悪影響から身を守るために用いることができる唯一の楯が、整えられ、意味のあるイスラム教育なのである。これは、イスラム教育の利益を忘れることなく、異なる状況においては異なる方法で、はじめてから終わりまで整える必要がある。

したがって、イスラム共同体による教育は、盲従と心理的従属に向かうのではなく、この世界において価値と責任のある1人の人間としての人生の完全性のために、彼らの心理と個体にとっての肥しになる。いまこそイスラム共同体を教育する行いを意味のある適切な方法で行うときが来た。その教育を、スラウや限られた範囲の人々の間だけに限ることは、我々イスラム社会にとって大きな損失をもたらす。どの段階でも、その習慣の求めるものに従った、そしてその分野において意味のあるようなサービスが得られるよう。そうすることによってのみ、この国のイスラム共同体は教育を身につけ、完全に崇高なものとなることができる。

(2)ズルキフリ・ムハンマド

「イスラム教における文化」(1956年5月)⁵

ある長い時期、ともに生活する人々の集団の間で、

5 Zulkifli Muhammad. 1956. "Kebudayaan dalam Islam." [Qalam. 1956.5: 18-21].

ものごとを行い、考えるに当たってのあるやり方が生まれ、その人間集団によって受け入れられ、彼らの生活の基礎となることがある。このやり方は、社会学にしたがえば、一般的に「文化」と呼ばれる。したがって文化とは、ある時ある人物が作り出したものではないし、ましてやある社会がその成員のために作り出した生活上の振舞い方でもない。

この振る舞いのやり方が作られると、それは社会の中で、強く、深くなる。そしてそれによって文化の地位を得る。そしてそれが形成された時だけでなく、その後が続く時代まで影響力を及ぼすようになる。人間の生活への文化の影響はとても大きく、社会の成員が、人間のふるまいは文化によって作られるというようになるほどである。

人がこの世に生まれると、その目の前には、様々な形の人生の要求が置かれている。もし人が、これらの要求を満たすための方法を自分だけで探すとしたら、その方法を探し出すだけで一生を終えてしまうだろう。しかし、文化があることで、彼は大きな遺産を手に入れている。それは、すでに長い間にわたって整えられ、試みられ、認められた考えや行動の方法である。この方法を使うことによって、よりよい結果が得られるだけでなく、その方法に影響を受ける社会に受け入れられることになる。

人間社会が、ある時、ある文化のやり方を受け入れるのは、それが最もよい方法だからでも、調べた結果その時代にふさわしいと判明したためでもなく、それがすでに存在しており、広く受け入れられているためである。すでに枯渇し、腐敗し、時が経って人々の欲求や道具がすでに変化した時代にあって好ましいとは言えないようなやり方を人々が採用するのは珍しいことではない。このように、それが弱く、特定のものに動かされうることから、文化は生活様式とともにその社会の成員からめったに反対されない影響を持っている。

人間の文化は、先ほどの広い意味において、人生の要求を満たすための生活上の制度を作る。そこから、政府、家族、宗教、経済、教育といった生活の諸制度が生まれる。生活の制度のあり方を通して、文化はそのうえにその人間集団の人生哲学を生み出す。生活環境が似ているにもかかわらず互いに文化が異なる人間集団があるのはこのためである。彼らの生活習慣や生活様式の違いは彼らの人生哲学の上に作られる。いずれにしろ、その違いは、多くの人が考えるのとは違っ

て、お互いの文化的価値の違いを生むとは限らない。それは、個人の性格を違うものにし、人間集団どうしの違いを生む。文化の価値は、それぞれの人生哲学に従って人生の要求を満たすかどうかによって評価されるべきである。

どの人間集団にも人生哲学や信仰がある。したがって、もしある文化があり、そこから人生哲学が生まれるのだが、文化が違ふとしたら、人生哲学も異なることになる。そのため、お互いの間に優劣はないということだ。

この事実は、外来文化に優を与える前に気にかけているとおり、実に重要である。他の集団の文化は、彼らの人生哲学のはかりにしたがって彼らに有益であるかもしれないが、その文化のやり方は、古い服を着た我々の生活上の要求を満たしてくれるのだろうか。これはまだはっきりしていない。我々が調べ、気をつけねばならないのはこのことだ。

このことは、もし「文明」と言ったときには、その地位は異なる。なぜなら文明は人間の道具を意味し、それに対して文化はより広く、人生の内容、哲学、習慣、精神を含むからだ。文明は人間集団の生活の便利さや地位の向上を目指す。このことは、場所が異なる人間集団の間でも大きく異ならない。例えば、文明では機械を使う。この道具は、自分の人生哲学や信念を損ねることなく全ての人間が使うことができる。しかし文化では、例えば西洋人が用いているような異性交友の文化をイスラム教徒が用いたら、彼らの文化的な価値の低下を招くことになる。

今、我々の前には文化についての2つの問いがある。1つめはムラユ文化の面から見た外来文化についてであり、2つめはイスラム教の面から見た我々の文化についてである。

1つめの問題において、ムラユ民族は自身の文化を持っている。それは慣習であり、宗教であり、芸術であり、生活習慣である。そのどれもが自分から生まれ、何世紀にもわたって人生の中で関係しあってきた。この文化がムラユを形作り、独自性を持っている。

そこにおいてまた、様々な形の外来文化が少しずつ我々の生活にのしかかってくる。その結果、ムラユの慣習の多くがうち棄てられ、ムラユでない文化がその代わりに据えられている。生活様式の変化は、それらの外来のやり方がより有効だと我々が考えるためではなく、たいていの場合、経験が少なく、我々が自分の文化をしっかりと握っていないために生じる。

この弱点は、多くの理由がある。大きな理由は、政治と精神である。植民地支配の絶対的な優位によって、我々の政治生活だけでなく、文化の形態まで圧迫されるようになった。そのため、我々の多くがムラユの文化よりも西洋の文化のほうをよく知っているという事態が生じている。

花壇に花を植えること、ある人のことを深く思うこと、誕生日にパーティーを開くこと、結婚式用にケーキを作り、それをカットすること、花のネックレスをつけることなどの西洋の文化はどれも、我々の社会への西洋文化の浸透の例である。ムラユの文化に根ざさないそれらの慣習の浸透に伴って、我々の古い文化は弱く、負けてしまう。この敗北は文化の大きな没落であり、外来のやり方が我々の生活に根付くとムラユのやり方が消えて完全に失われてしまうため、我々はそれを守らねばならないのだ。

ここにおいて、ムラユ文化の管理の問題が生じる。文化の変化は驚くに値しない。なぜなら、文化のあり方はもともとそういうものだからだ。ムラユの文化自身をとっても、他の文化から生まれ、変化を経験して生きている。我々の生活のあり方の変化が問題なのではない。その変化がどこに向かうかに注意する必要がある。もし他の文化を真似したら、それによって我々の生活の要求を我々自身の哲学に基づくような形で満たすことができるのか。これが、我々の文化の変化を受け入れるに当たっての重要な問題である。

ここにおいて、実際に、ムラユの文化自身において、我々を我々の人生の目的にもたらさないだけでなく、それを危険にするような文化や慣行がある。すでに我々の社会においてあらかじめ調べられることなく受け入れられていたような外来文化から浸透したわずかな慣習ではない。結婚式や葬式での浪費や、社会の構成の違いや健全な判断と相容れない混乱した信仰を目指すものは多く、我々の社会でまだ影響を持っている。我々の文化の歴史や慣習の起源を調べてみれば、それらのやり方は我々の民族や生活の状況にふさわしくない外来の哲学に根ざしたものであるとわかる。

このように、文化はその道行きを管理し、方向付けしなければならないことは明らかである。我々の文化を漂流させることは、我々が辛酸を舐めている今、損失を繰り返すことになる。

ここでイスラム教と文化の問題が生じる。イスラム教において、生活様式と思考の様式は、無論その教えに従って定められている。これがイスラム教によって

受容されている文化であり、イスラム教はこの大綱に従って人生が進められることを求める。慣習、文化の形態、芸術、慣行はもちろんイスラム社会の中でもあるイスラム教徒と別のイスラム教徒の間で異なっている。しかしその基本はイスラム教とその教えに従っている。ある生活様式へのイスラム教の受容と拒絶はその教えと価値が同意するか否かに基づく。

イスラム教徒は、人間の生活の全ての活動をその範囲に入れているため、文化の上位にある。イスラム教がイスラム教徒の文化の形を決めるのであって、イスラム教が人々の文化に従うのではない。

これは、イスラム教は文化を普及させないことを意味しない。むしろ逆に、文化のある形態を検査し、価値を与えることによって、イスラム教は継承される文化の崇高さを増やしてきた。文化の評価を与える中で、イスラム教は文化の中の権利を持つ側として尊重してきた。もし、自分自身に社会の中で通用する文化や慣習の鎖を作り出すことで人々に損をさせ、人々の権利を奪う形があるとしたら。イスラム教は、イスラム式の判断に従って良し悪しを調べるよう、人々に文化の形態1つ1つを調べるよう命じることで、そういう鎖をこわしてきた。

これに基づき、我々は、ムラユの文化を1つ1つ調べる必要がある。慣習、慣行、芸術、生活様式の多くは、我々の生活の中に位置づけられる前に調べる必要がある。混乱し、損失を与えるものは、たとえ数十世紀も生き続けていたとしても棄てる必要がある。外来文化の浸透は、我々の共同体に、我々の人生哲学に従った大いなる利益がある時のみ浸透が伝えられる。我々の人生哲学にしたがってこれについて我々の損失についての基準はイスラム式でなければならない。なぜなら、自尊心を持った人にとってイスラム教こそがふさわしいやり方であるから。

我々が文化に対してよくしようとするとき、我々は賢明な基準を用いなければならない。もしそれが道徳や人生や知覚を損ねるものであれば、すでに埋葬されたものを生き返らせるのは役に立たない。逆に、イスラム教によって命じられた文化の金串を持ち出すべきだった。

いずれにしろ、我々は、その形を作り出したもとの人生哲学を忘れてしまうほどに、ムラユ文化の小さな部分に対して熱心になりすぎるべきではない。人間の生活において、哲学こそが最も重要であり、形はそれがわずかに揺れた絵に過ぎない。

参考文献

- Alias Mohamed. 1994. *PAS' Platform: Development and Change, 1951-1986*. Selangor: Gateway Publishing House.
- Ibnu Hasyim. 1993. *PAS Kuasai Malaysia?: Sejarah Kebangkitan dan Masa Depan, 1950-2000*. Kuala Lumpur: GG Edar.
- Zakiah Hanun. 1980. *Inventori Surat-Surat Persendirian Zulkifli Muhammad*. Kuala Lumpur: Arkib Negara Malaysia.